
ねこロケット

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこロケット

【Nコード】

N6382Z

【作者名】

あひる

【あらすじ】

神は少年の胸座を掴み、殴り飛ばしてこう言った。

「愛されない事に不貞腐れ、生きようとしないう前が、命を賭して愛してくれる誰かに出会った時、その願いを受け止めようともせず、その愛に報いようともせず死んでいくのか。

手を伸ばせ。掴み取れ。その足で立って、乗り越えて。愛する者に報いて見せよ。」

肩を震わせ、そう怒鳴った少女の瞳は、暗い悲しみに溢れていた。その日、その時から少年は強くなっていく。

雪白と山姥（前書き）

初投稿処女作です。初めのうちは重めですが6話から一気に軽くなります。

ラブコメ時々シリアスが本来の姿ですので。

尚、小説は教科書でしか読んだ事ない理系の文章だという事を警告しておきます。

そんなスコップで大丈夫か？

雪白と山姥

1896年、明治三陸大津波によって岩手では甚大な被害が出た。

人の世で災いが起これば、神の世界も慌しくなる。

日本の神界で中心的役割を持つ中央神道行政の八戸支局長、光世^{りよ}、同じく不来方支局長で光世の母、桜前尼^{おうぜんに}は震災以降度々京都に呼び出され、結果として被災地の神事行政は混乱していた。

そんな折、下北半島の恐山周辺では子連れの山姥が暴れ出し、多くの家畜が襲われ、分かっているだけでも6人の死者が出ていた。

たまらず八戸支局から、勇猛で知られる新田広門を長とした討伐隊が派遣されたが、つい先ほど、その討伐隊が返り討ちにあい、隊長が戦死したという知らせが届いた。

被害は新田氏だけにとどまらず、隊員2名が負傷、御使い3体死亡という散々な有様で、これ以上の任務には耐えられず、すでに撤退を始めたという。

副局長の馬渡金兵衛は直ちに参与らを集め、対応について話合ったが、あの新田氏が敗れたとあって動揺は大きく、出てくるのは弱音ばかりであった。

「光世様が帰ってくれば山姥などは…。」

「津軽に援軍を頼むなど有り得ぬし…。」

「なぜこんな時に限って暴れだしたのか…。」

「不来方は沿岸部の対応で手一杯と聞く。桜前尼様も不在とあれば援軍は出せまいよ…。」

ここは我が、と手を挙げる者も無く、このまま光世局長が帰るまで問題を先送りにするしかない、という意見が大勢となって会は閉

じようとしていた。

しかし、そのようなことになれば無能となじられるのは留守を預かる副局長の馬渡氏である。このまま兵を引くわけには行かず、馬渡氏はやおら立ち上がり、机を叩いて提案した。

「函館には武神と仰がれるホルケウリムセル殿がごいます。氏の助力を得て、討伐隊に合力させるべきであります。函館からなら恐山とも近く、早々に問題は片付きましょう。」

この提案には積極的に反対するものも無く、即日馬渡氏は函館に使者を送った。

函館分支局は、早速にも援軍を出す約束した。

その援軍に先立って、道案内のために派遣されたのがキロルカムイ（アイヌ語で道の神）の名を持つ雪白であった。

雪白はニセコの雪女であったが、慈愛に満ちた性質で、雪山で道に迷った民を度々集落まで帰してやるなど、人と関わるうちにキロルカムイとして信仰されるようになった。

後にホルケウリムセルの妻となり、上級神の登竜門である神学舎に入学。方術制御に長じ、次世代統治支援システム「アマテラス」の構築に携わり、現在はアマテラス管理部門非常任顧問の職にある。寿命も定年も無く、固着化した神界の人事事情にあつて、妖怪からの「神上がり」としては異例の官位持ちまで出世を遂げた才女である。

普通、神は精神体の状態で日々を過ごすが、特別な理由があつて実体化した状態のことを示現しげんする、と言う。

逆に精神体でいることを、解現げげんする、と言い、解現している間は現実の物体からの干渉は受けないし、逆に干渉も出来ない。また、宙に浮いて移動することが出来る。

雪白は単身津軽海峡を飛んで渡り、大間崎に入ると、早速土地の調査を始めた。

道案内、と言っても、道路そのものを調べるわけではない。実際に調査しているのは、地脈、水脈、霊脈の位置と強さ。これらは神や霊体、妖魔などにとって極めて重要な地理的要因となるからだ。

大間から東周りで恐山を迂回して、人々が多く暮らす田名部（現むつ市）の集落に向かう途中、雪白に声をかけて引き止めた少女が居た。

年の頃は10歳前後。粗末な服を着て、顔も手足も随分と汚れている。伸ばしっぱなしでやや硬そうな黒髪がバサバサと絡んで、いかにもどこにでもいそうな、寒村の子供といった風貌である。

しかし、只者でないことは確かだ。

実体化していない雪白を見ることができるということは、霊的素養の高い人間か、人外の者である。それらは雰囲気ですぐに区別がつくものであるが、どうもこの娘はどちらなのかはつきりしない。

年経た妖怪の変化した姿の样でもあるし、ただの人間の子供の样でもある。

「あなた、この辺の子供かしら？」

優しく訪ねると少女は首を小さく横に振り

「たいそう強く賢き高貴な神様とお見受けします。どうか私の願いを聞いて頂けないでしょうか。」

と畏まって答えた。

「どうして私が神様だと思うの？ 悪霊かもしれないわ。」

「私も昔は神だったのです。だから分かります。」

「昔は？」

少し間をおいて少女は答えた。

「今は山姥の子と成り果てました。」

雪白は肝を冷やし、辺りを見回した。のんびりとした里山の風景に違和感はなかった。

確かに子連れの山姥と聞いていたし、からかわれているだけというのも考えにくい。この子の言うことが真実ならば、山姥は近くに居るはずである。それにしても、一体何が目的で接触してきたのだろうか。

様々な憶測を心の中で整理しながら、核心に触れていく。

「では、あなたの親は今どこにいるの？」

「私の願いを聞いてくれるのなら、母のところまで案内いたします。」

「

「願いと言うのは？」

「母を打ち倒して欲しいのです。」

「どうして？」

「これ以上狂い、罪を犯す姿を見たくないからです。」

少女は、台本を音読するように淡々と訴えた。

「そう……。」

雪白はあまり戦いを好まないし、武で手柄を上げる必要にも迫られてはいない。しかし、ここで断ればこの子はどうするだろう。引き受けても、本隊が来るまで待つていてくれるだろうか。その間にも山姥は凶行を犯すのではないか。

畏である可能性も充分にあるが、あえて雪白は少女の願いを聞き届けることにした。

神は、アマテラスを通じてそれぞれの階級や所属する神社の格によって神力が支給される。これを天の力といい、地脈や霊脈から神社を通じて受け取る霊力を地の力。民からの信仰を受けて手に入る霊力を人の力といい、その天地人の力の和が、その神の強さに直接影響してくる。

雪白は従七位の官位を授かっていて、十分な神力を供給されており、アイヌからの信仰も受けている。地元の函館を離れている現在は地の力を受け取れないが、それでも並外れた神力を蓄えていおり、方術のエキスパートでもある。

低級妖怪の山姥などに遅れをとるようなことは考えられなかった。

山姥の子

夏の走り。時刻は17時をとくに過ぎていたが、まだまだ暑さは収まりそうもない。

雪白は足早に進む少女の後を追いつながら、不意打ちに備えていた。数歩で渡れるほどの小さな川に差し当たると、少女はそこで足を洗い始めた。幾らか心に余裕が出た雪白は、ようやく気になっていたことを問う機会を得た。

「まだあなたの名前を聞いていなかったですね。」

「私も聞いていませんし、教えられません。」

元気の無い声だった。

「私は雪白と申します。この服はアイヌの物ですよ。陰陽師に似てはいるけれど、私は名前を知ることと相手を支配するような力はありませんから。」

「雪白…さま…」

「昔は神だったというのなら、あなたの母親もやはり神だったのですか？」

「そうです。」

魔堕ち、ということだった。妖怪が神になることもあれば、神が妖怪になることもある。真の肉体を持たない神や妖魔にとって、穢れというものは極めて重要な意味を持っている。

命を奪うこと、命を食すこと、悪意を受けることで積み重なっていく穢れは、魂を侵食し、精神を蝕む。一方で、穢れは非常に強い霊力をもたらしもする。

今度の山姥は相当な穢れを溜め込んでいる可能性がある、と八戸の使者は言っていたが、その山姥と一緒に行動しているはずのこの

子からは、あまり穢れを感じなかった。かと言って穢れが無いような気配も感じらず、限りなく人間の雰囲気に近い印象だと感じられた。

「どうして、あなたは体を持っているの？」

「もうずっと前から、姿が消せなくなりました。母も同じです。穢れが貯まり過ぎるとそうなるのだと思います。」

人間が死後に祀られ一旦神となり、その後魔に堕ちると、実体を持った妖怪になりやすい。この少女の話にはそれなりに信憑性があった。

だとすれば、母を討って欲しいという願いも、偽り無い本心なのだろうか。

雪白の心は揺れていた。

例えば少女が嘘をついていたとしても、畏だとしても、山姥は滅ぼさなくてはならない。では、その時この子はどうすればよいのか。やはり、滅ぼさなければならぬのだろうか。

「結局、私ももう、妖怪なのだと思います。」

少女は石に座り背中を丸め、足元をじっと見つめながら、益々元気の無い声で呟いた。

長い時間悩み抜いてきた様子に見えたが、それも演技であるかもしれない。

この悔いが本心であって欲しい。救いのある結末を願い、雪白は励ましの言葉をかけた。

「でもあなたからは、あまり強い穢れは感じません。これから浄化していけば、必ず神に戻るでしょう。」

そう言われても少女の顔は冴えない。

「浄化ができれば、犯してきた罪は問われないのでしょうか？」

その質問はあまりに重く、雪白は答えられなかった。

空気の悪さを察してか、少女はすっと立ち上がって、行きましよう、と少しはにかんで見せた。

川の向こうは広葉樹がまばらに伸びる、明るい林であった。木漏れ日も多く、こんな状況でなければ心地よい緑の雲の中を散歩している心地だったのであろう。

川から離れると、間もなく風向きが変わった。

風に混ざっている瘴気。そして血の臭い。とっさに雪白は風下へ飛びのき身を隠す。

少女はその場に立ち尽くしたまま、何か考え事をしているようだった。

じわり、じわり、臭いは強くなっていく。

数分後、西に向かう獣道から山姥が姿を現した。

ゴワゴワの白髪は天を衝き、その目は闇に染まり、もはやどこを見ているのかも分からない。赤茶けた肌に深く刻まれた皺は、旱魃にひび割れた田の泥のようである。

その腕にはだらしなく四肢をぶらつかせた、小さな体が抱えられている。

動物などではない。明らかに人間の子供の死体であった。

山姥はその死体を少女の前にひょいと放り出して衣服を剥ぎ取ると、ニタリと笑った。

「いい子だったよ。最高の食事だよ。今日はいっぱい頑張ってきたんだあ。これならおまえも食べたくなるよ。」

仰向けに倒れた4〜5歳の女の子の生気のない肌に鋭い爪を突き立てて、内臓を抉り出し、ニタリニタリと笑う。

「ここが一番栄養があるんだよ。おまえが食べるんだよ。一番良い所だから。」

暗赤色の血が滴る、黒い塊を掴み取って、少女の眼前に捧げる山姥。

「贅沢ばかり言っていてはいけないよ。ずっと食欲が無かっただろ

う。心配なんだよ。さあさあ、今日のは本当に良い所だから。」

「もういいよ。もういいんだよ。母上。もう私は何も要らないから。」

少女は搾り出すようにつぶやいて、臓物を受け取ると、幼い少女の腹の中にそつと戻した。

そして涙をこらえ叫ぶ。

「雪白様。御覧になったでしょう。これが私達です。お願いします。母を止めてください。私にはもう耐えられないッ！」

笹藪の影からスツと音も無く現れた雪白は、先ほどから練っていた方術陣を解き放つ。

タケノコのように地面から飛び出してきた無数の氷柱は碧く光りながら3人の周りをすらりと取り囲み、それぞれが甲高い羽音のような唸りをあげる。4 mもの高さを持った柱と柱の間には透明な壁が張り巡らされ、氷の柵牢がたちまちに組みあがった。

事の次第を悟って、山姥は奇声を発し、地面に頭を打ち付けた。
「なして！ なしてだ！ こんなに大切に育ててきた我が子がっ！」
嘆きはすぐに怒りへと変わる。

「裏切った！ 親を捨てた！ 私はまた一人になったんだ！」

血に汚れた手で、覆い被さるように少女に掴みかかる山姥の足をドングリ大の雷が撃ち抜く。

「下がっていなさい。ここから先は私の業いづです。」

少女に退去を促し、氷の結界の内壁を滑るようにすばやく移動しながら隙を窺う。

本当は結界の中に少女を入れたくは無かったが、それができる位置関係ではなかったので、どうしても少女の位置を気にしながらの

戦いになってしまふ。

小さな攻撃を繋げるより、隙を見て一撃で決めたい、その判断が雪白を守勢に回らせた。

先ほどの雹による攻撃はほとんどダメージを与えられず、傷は瞬く間に癒えていた。

やはり、大きな術が必要と感じて距離を取る雪白だったが、妙な息苦しさに気付いた。

山姥の放つ瘴気が結界の中に充満し始めていたのだ。この瘴気に触れ続けられ、魂が穢れてしまふ。やむを得ず雪白は穢れへの抵抗を高める為に示現して戦わねばならなくなった。

実体化すれば、空を浮遊することは出来ず、機動力が大きく殺がれてしまふ。また、結界によって土俵が限られている以上、自然と近距離での肉弾戦が主となっていく。

雪白は方術こそ得意だが、体術は苦手としており、山姥の猛攻に劣勢になっていた。もはや大きな術を練る余裕ではなく、氷のつぶてを飛ばしつつ逃げ回るような状態が続いた。

少女は不気味な沈黙を保ったまま、どちらの援護もする気配はなかった。

いかに季節に恵まれないとは言え、山姥の如き妖魔に官位持ちの自分がここまで追い詰められるとは。相手を甘く見ていたことを後悔しつつ、状況の打開を探る。

山姥の一撃一撃は強力であるが、動きの連携は良くないように思えた。夫のホルケウならその隙を付く武勇を持っているが、雪白には無い。やはり方術を上手く使わなければ勝機がつかめないのだと分かつてはいるが、この敵はそのための余裕を与えてはくれなかった。

気付けば結界の氷柱は随分と解けてきて、もう長くはなさそうである。早く決着をつけないと取り逃がすかもしれない。見失うことになるればまた人が、子供が殺されるのだろう。

意を決した雪白は自分の周りに氷を張り巡らし、自ら氷漬けとなつて防御を固めた。

「亀にでもなつた気かい？そんなものすぐ壊れるよ。」

山姥は力いっぱい氷像と化した雪白に殴り掛かる。

一撃、二撃、三撃、四撃目には氷の鎧にひびが広がる。

これが雪白の時間稼ぎであることを、山姥は見抜けなかった。

「ふん。もう終わりだよ。おまえの魂を食えば私はもっと強くなる。そうしたら頼朝ごときの結界、打ち破つてやるのさ。」

2歩、3歩退いて、助走をつけて全力で雪白を打ち砕こうとする山姥の背中に激痛が走った。

振り返ると山姥の子は、物憂げに立ち尽くし、その様子を見ていた。

「！？まさかおまえが？」

「いいえ。その子は何もしていません。」

そう言つて氷の鎧を脱いだ雪白が右手を突き出し、手のひらを閉じる。

一番最初に張り巡らした氷の結界。その無数の柱が次々と山姥に襲い掛かる。

懸命に2本3本と叩き落しはするが、それが限界であつた。死角を突いて時間差で降り注ぐ槍の雨になすすべも無く撃ち貫かれていく。

もがいてもがいて、また立ち上がつては氷の槍に貫かれ、ついに山姥はどうつと倒れこみ、もはや雪白を睨みつける余力も無いように見えた。

それでも雪白は用心を怠らない。
弱った振りをして油断を誘うのは、妖魔の常套手段である。

少し距離を置いて、新たな結界の方術を練り上げていた時、突如
雪白の視界が黄昏色に染まった。

人一人分の小ささながらも、密度の高い強力な結界であった。
ハッとして振り返ると、そこには振り乱した髪もそのままに、
氣迫に満ちた視線を送る少女の顔があった。目の前で母が傷つき敗れ
る様にも動じる気配が無い。

雪白はゾクリとした。

（まさかこの子は…山姥の本体は…）

母の愛、子の願い

少女は物も言わずツカツカと大樹の根元に歩み寄ると、膝をたたんで両手を地面に置いた。

そして何かを掴むような仕草をした後、ゆっくりと膝を伸ばす。

その両手には黒い諸刃の直刀が握られていた。まるで元よりそこに突き刺さって居たものを引き抜いたようにも見えたが、自らの力で土と砂鉄から造り出したものだ。

少女はその刀を自らの両足に向けて強く突き刺した。

ドンッと鈍く、くぐもった音が森に染み込んで、少女は大地に縫い刺された。

苦痛の息すらも漏らさず、次いで木々に絡みつく蔦を引き寄せて、その細い首に巻きつかせる。蔦は首だけではなく、その四肢をも縛り上げていく。

雪白は嫌な予感に震えていた。

古来より、自らを傷つけ、その苦痛を力に転化して術に上乘せる呪術が存在する。この子は私を屠る為に、力を練っている。私が力を出し尽くし疲れるまで、静に待っていたのではないか。人を騙し、罠に陥れるのが妖魔というものなのだから。

そう思えて仕方が無かった。

まずはこの結界を破らなくてはならない。密かに結界の術式を探っている、ようやく少女が重い口を開いた。

「雪白様……」

搾り出した声には、隠し切れない苦悶が感じ取れた。

「雪白様。最後のお願いが……御座います。」

相変わらずその眼には底知れぬ力と強い意志が感じられたが、その声に敵意はないようだった。

「私はこれから正真正銘の化け物となります。そうなりましたらどうか、私を滅ぼしてください。どうか、お願いいたします。」

その意図を測りかねていると、痛々しくも、少女は笑って見せた。そしてこの森の全てをその胸に収めんがほどに空気を吸い、詠い始めた。

『高天の原に 神留まります 皇が睦 神漏岐・神漏美の命以ちて 八百万の神等を 神集へに集へ給ひ…』

唐突に始まった大祓詞に雪白はここでようやく少女の真意を得た。この子は私を畏に嵌めるものではなく、かといって母を裏切るものでもなく、ただ母の穢れを我が身に移し、元の姿に戻してやるための時を待っていたのだ。

狂気に吞まれた母はきつと祝詞に強烈な拒絶を示す。だから身動きも出来ぬまでに衰弱する時を、待っていたのだ。その時を得る為に、私を母の元に連れて来たのだ。そして、全ての穢れを背負って一人、死んでいこうとしているのだ。

全ては、母を救いたいが為に

だが現実はその容易くは無い。

穢れを抜うということが、どれだけ難しいことであるのかをこの少女は知らないのだろう。

なぜゆえに、世に妖魔がはびこるのか。因果というものの重さは実に烈しい。

最高位の神ですらこの山姥の負った穢れの1割も抜えるかどうかまして、なんの訓練も受けていない、無官の幼子が、いかに一字一句過たずに大祓詞を奏したところで、髪の毛一本ほどの穢れも浄化出来はしないだろう。

少女の母への想いとその覚悟、そして哀れなまでの無力さが雪白の胸を締め付ける。

せめて最後まで見届けてあげようと、深い敬意を目頭に溜めて、

少女の祝詞に耳を預けた。

肅々と、流れるように、少女は祝詞を歌いきった。

一体どこで覚えてきたのか。その健気さが雪白の心に突き刺さる。どんなに想っていても、どんなに正しく詠えても、何も変えることはできない。

変えることはできない。そのはずだった。

次の瞬間、雪白は我が目を疑った。

少女の目交いに、灰色にくすんだ太陽のごとき方術陣が鈍く輝き、風車のようにくるくると回り始めたのだ。よくよく見れば剣九曜の神紋である。

変わるはずの無い現実が、変わろうとしていた。

「母上。ずっとそばで愛してくれてありがとう御座いました。私は元より生を受けぬ者ゆえ、居るべき場所へ戻りたく思います。いつか、いつか、母上が父上と共に安らげる日々を過ごされますよう。兄上とともに少し遠くより、願っております。」

少女がそう語りかけると、山姥の体から立ち込める瘴気がズイと銀色の太陽に引き寄せられていく。

疲れ果て、うずくまったままの山姥から、モロモロと穢れが引きはがされては少女にこびりついて行く。その様子に雪白は声をひしやげて叫んだ。

「やめなさい！それはあなたが背負うべき業ではありません。もう、やめなさい。」

身にまとった罪悪の外套が軽くなったからか、山姥は少し体を起こして辺りを見回した。

すかさず雪白があらん限りの大声で訴える。

「聞こえますか？私の話が聞こえますか」

声を張り上げ、何度も語りかけるうちに、

山姥はどこかぼんやりとしながらも、雪白を正面に見すえた。まさに憑き物が落ちたというべきか、それはもう、先ほどの憎悪に満ちた表情ではなかった。

白く逆立っていた髪の毛も、幾分黒さを取り戻し、乾いた赤土の如き肌も、人の物と判るまでに戻ってきている。

だがそれは、それだけの穢れがすでに少女に受け渡されたということでもあった。

「残念ながら、あなたは罪人です。如何な事情があつたかは存じませんが、あまりに多くの罪を作り、その報いを受けなければなりません。しかし、今、あなたの子がその業を肩代わりしようとしているのです。わかりますか？」

「ええ、覚えております。私は、私は：なんと罪深いことを……」

足元の土をかきむしりながら、山姥はうるたえるばかりであつた。「親の罪を子が購うことを、あなたは良しとするのですか？このまわが子が魔に堕ちていくのを黙って見ているのですか？」

「嫌です！私はもう、子を失いたくはありません。」

山姥は涙声で力強く答えた。

「ならばお守りください。あの子を救えるのはあなただけなのです。」

「一体、どうすれば……」

「あの方術は祝詞に込められた言の葉によつて編まれた物です。あなたの、子を思う気持ちを言霊に託して祝詞返しをすれば、あとは心の強さのせめぎ合いとなるでしょう。相手を思う気持ちの強いほうが、穢れを引きよせることになります。」

「そう……」

「そうですね。私は強くなければならない、それであの子を救えるのなら。私は今一度鬼と身を落しましょう。」

そう言つて、山姥はわが子と向きあい、言葉を紡いでいった。

「舞宵^{まよひ}。私は愚かな母でした。そして力なき母でした。あなたの兄もみすみす奪われて殺されて。そして今度はあなたを生きて産み落とすこともできなかつた。」

少女はブンブンと頭を振つて否定する。

山姥は続けた。

「せっかく皆が私達を悼み、神として祀つてくれていたのに、それを捨ててこんなところで鬼と成り果てて。どれだけあなたにづらい思いをさせてきたのでしょうか。それを分かっているながらも、ただ愛しいあの人の元へ参りたいという弱き女の一念にて、押しとどまることができなかった。」

「母上はずうつと優しくかつた。弱くなかつた。それに、私だつて父上に会いたかつた。だから…何も…」

「そう。私はあの人を想い続けた。そして舞宵。あなたのことも愛し続けた。でも、やはり私は道を誤ってしまったの。愛し方を間違つてしまった。そしてその罪は私が背負うべきものなのです。子に背負わせてしまつては、私は母を名乗る資格を無くしてしまふ。」

少女も食い下がる。

「だつて、私のせいだから。私を育てる為に、母上はいつも必死で一生懸命で。その為にやったことだから。私は見てたから。ずっと分かつてた。私が居なければ、母上が盗んだり殺したりはしなかつた。それなのに私は何もできなかつた。止めることも。消え去ることも。もう大丈夫だから。私はもう、充分幸せだったから。だから、最後に恩返しをさせて…」

油蝉の騒々しい声は消え、ヒグラシの声が響く。

一匹が鳴けば、十匹が答える。いつの間にか、風は涼しさを帯び始めていた。

「舞宵。あなたは間違っているわ。いい？」

一息ついて、姿勢を正して続ける。

「あなたはまだ幸せになんてなっていません。親の元で得られる幸福など、たかが知れているものです。大人になって、私の元から離れて、それで一人前の幸せと創ってゆけるですよ。」

「そして、親に恩を返すというのなら、その行いは親ではなく、いつかあなたが母となった時、その子に返していくべきものです。私も、私の祖先も皆、そうして命をつないできたのです。それを勘違いしてはなりません。」

びたりと、瘴気の流れが止まった。平静を取り戻した母と、心を乱した娘。もはや勝敗は決していた。

「嫌だっ！私はもう、母上が汚れていくを見たくない！」

論を捨て、駄々をこねる少女に、母はうれしそうに声を和らげる。

「私はもう汚れたりはいしないわ。今ね、強くなったから。もう自分に負けたりはいしない。だから、さあ。」

山姥は手を方術陣に差し伸べ触れようとする。穢れがズズ…と母に戻っていく。

「駄目だ！戻っては嫌だ。私が。持って行くからっ！」

「信じなさい。あなたの母を。そして良く見ておきなさい。愛する人にはね、こうやって手を伸ばして触れたいと願うの。愛とは掴み取るものだから。」

方術陣に手をつ込み、さらにその向こうのわが子へと手を伸ばす。

肉が爛れ腐るような臭いが煙る。わずかに漏れる苦痛の溜息をこらえつつ、母はまた一步前に進む。

その迫力に、少女はもう言葉が出ない。

「私は諦めたりはしない。必ず立ち上がって、どんな結界も乗り越えて、あの人に会いに行くわ。そして私が舞宵の母ですって胸を張って言うの。そのためにね、舞宵。」

伸ばした手が愛娘の髪に届く。

「これからもずっと、あなたの母親でいさせて。」

母の髪はまたも白く乱れていた。ひび割れたレンガの如き頬をわずかに膨らませて、山姥は微笑んでいた。

堂々と、笑っていた。

母の愛、子の願い（後書き）

遅筆につき、更新は週一度を目標にしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6382z/>

ねこロケット

2011年12月21日14時52分発行